

# 栃木県における葬送儀礼の変容 (1)

——県内全域を対象とした実態調査をもとに

福島 明子\*

## I 問題と目的

かつて弔いの儀式は組や講組織など地域社会によって営まれていた。しかし昨今、海帰葬、山帰葬、宇宙葬、樹木葬といった自然葬の広がり、家族葬という名の密葬ブーム（碑文谷、2002）にみられるように、その埋葬方法や儀式形態が多様化している。葬儀の場も大きく変化した。全国各地の新聞死亡記事によると、自宅葬は大正2（1913）年に64.2%だったのが、大正12（1923）年は50%台、昭和8（1933）は40%台、昭和38（1963）年は30%台、平成10（1998）年は6%と推移している（八木澤、1985；八木澤、1999）。もっともこれは多くの参列者が予想される著名人の場合であるが、一般人の場合はどうか。過去3年以内に身内の葬儀を経験した人を対象とした実態調査では、平成11（1999）年に自宅葬約4割、斎場葬約2割だったのに対し、平成15（2003）年には自宅葬19%、斎場葬56%とほぼ逆転し（月刊消費者、2003）、やはり自宅葬離れが進んでいた。また同調査では、望ましい葬儀として半数以上が「家族に負担をかけずに簡素に」「費用を掛けない」「斎場で」と回答している。かつての地域社会による葬儀が、「人それぞれ、家族それぞれ」の意向による葬儀（月刊消費者、2003）、葬祭業者などの専門家主導の葬儀へと変化してきているのである。

なぜ葬儀をめぐる状況や意識の変化が加速しているのでしょうか。主なキーワードとして家族、地域社会、葬祭業の3つをあげることができる。高齢化や核家族化が進み、590万人もの高齢者が、子どもがいない、離れて住んでいるなどの理由で子どもに依存しない生活を送っている（碑文谷、2002）。地域のつながりも弱体化している。都市部や新興住宅地ばかりではなく、農村部においてさえ、過疎化、少子化、農業機械や車の普及、減反などによりかつてのような相互扶助の結びつきは少なくなっているといわれる。

そして3つ目のキーワードが葬祭業者や斎場の存在である。寺石ら（2000）によると、斎場建設ブームが始まったのは昭和60年代（1980年代後半）だが、その普及時期や拡大速度は地域によってかなりばらつきがあり、斎場葬の普及率が高いのは関西圏、首都圏、沖

---

\*作新学院大学人間文化学部 助教授

縄を除く九州、北海道、低いのが東北、沖縄、四国、東海などである。また寺石は、関西圏、首都圏においては、中心部よりも建設用地が確保しやすい周辺都市で供給過剰気味な傾向があると付け加えている。そうなる栃木県も斎場葬の普及率が高い地域ということになるが、実際、寺石は斎場葬の普及率が高い都市のひとつとして宇都宮市をあげている。

果たして栃木県においては葬儀のあり方はどの程度変化しているのだろうか。本研究では、全市町村を対象に質問紙調査を実施し、栃木県における葬儀の変容の実態を探った。

## Ⅱ 方法

### 1. 予備調査／インタビュー

本調査に先立ち、2005年4～7月、県内の主に70歳以上の高齢者15名を対象に人が生まれてから亡くなるまでの間に行っている（行っていた）各地域の習俗についてインタビューを行った。このなかで葬儀についても質問したところ、以前は組での葬儀、および土葬による野辺送りを含む葬儀が行われており、現在でもそうした地域があること、その他、地域ならではの弔い方がある（あった）ことが明らかにされた。

### 2. 本調査／質問紙調査

調査手続き：郵送法。下記の調査対象に依頼状、調査票、および切手を貼付した返信用封筒を郵送し、回答後、返信用封筒にて返送してもらった。

調査期間：調査票発送2005年10月27日、返送期限11月21日

調査対象：栃木県内のすべての市町村。郡の場合は各町役場、市については市内の各出張所等を対象とした。118ヵ所に配布し、以下の54の市町村（地区）から有効回答が得られた（有効回答率45.8%。図1参照）。足利市（織姫、久野、毛野、助戸、葉鹿、梁田、北郷、三重）、今市市（落合、塩野室）、宇都宮市（駅東、清原、国本、篠井、雀宮、宝木、富屋、豊郷、平石、瑞穂野、陽南、横川）、大田原市、小山市（絹、間々田）、鹿沼市（板荷、北犬飼、南押原）、上都賀郡（足尾町、栗野町、西方）、河内郡上河内、さくら市喜連川、佐野市赤見、塩谷郡（塩谷町、高根沢町、藤原町）、下都賀郡藤原町、栃木市（大宮、国府、吹上）、那須烏山市（烏山地区、南那須地区）、那須郡那珂川町、芳賀郡（市貝町、芳賀町、益子町）、真岡市。以上五十音順。なお、調査後、市町村合併した自治体もあるが、調査時点での呼称で統一した。

調査内容：予備調査結果をもとに、以下の4つに関する質問項目を作成した。①現在、および以前の組での葬儀の有無とその方法、②現在、および以前の土葬の実施有無とその方法、③現在、および以前の野辺送りの実施有無とその方法、④その他の弔いの習俗。

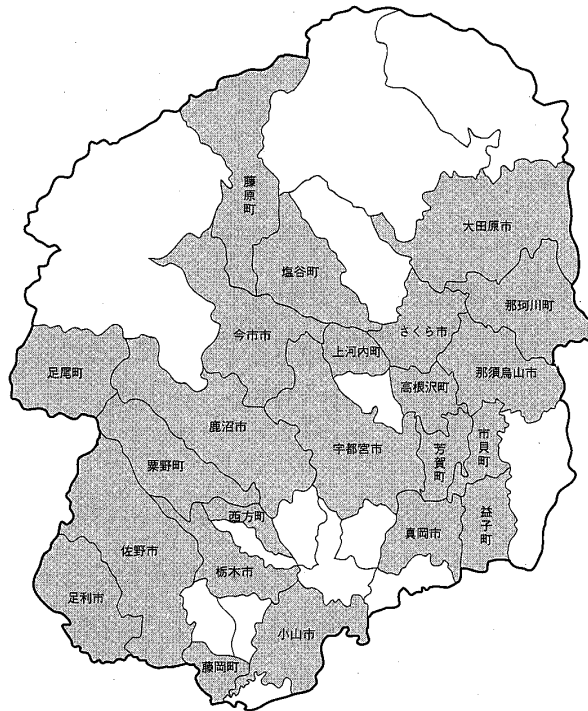


図1 調査協力市町村（調査時点の市町村名で記載）

### Ⅲ 結果と考察

#### 1. 現在の葬儀方法

現在どのような方法で葬儀が行われているか選択肢のなかから回答を求めたところ以下のような回答が得られた（カッコは回答数。同じ市町村でも地区によって異なる場合もあり複数回答。また葬儀を行う単位の呼称は、組のほか組内、班、隣組など地域によって異なるが、本稿では便宜上、組という呼称を使用する）。組で葬儀一切を行っている（14）、組と葬祭業者が一緒に行っている（33）、葬祭業者に葬儀一切を頼んでいる（10）、わからない（14）。以上を各被調査地ごとにまとめると、以下の8つに分類された（カッコは回答数。図2参照）。

- ①組で行っている（2）
- ②組で行っている地区、組と葬祭業者がいっしょに行っている地区がある（9）
- ③組で行っている地区、組と葬祭業者がいっしょに行っている地区、葬祭業者に頼んでいる地区がある（2）
- ④組で行っている地区、葬祭業者に頼んでいる地区がある（1）
- ⑤組と葬祭業者がいっしょに行っている（19）

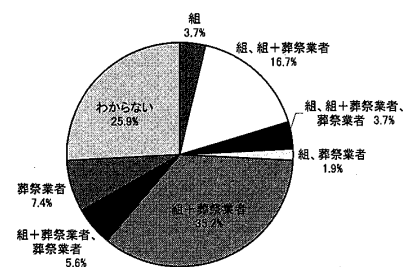


図2 現在の葬儀主体

⑥組と葬祭業者がいっしょに行っている地区、葬祭業者に頼んでいる地区がある (3)

⑦葬祭業者に頼んでいる (4)

⑧わからない (14)

もっとも多かったのは組と葬祭業者がいっしょに行っている地域であった。組だけで行っている地域も併せると、ほとんどの地域で組が関わる葬儀を行っていた (①～⑤、⑥の一部。図3参照)。葬祭業者に葬儀一切をまかせている地域 (⑥の一部、⑦) はまだ少数といえ、それらのすべてが以前は組で葬儀を行っていたと回答した。他の実態調査でも、回答者の約半数が町内会や班、講などが中心となって行われていると回答している (月刊消費者、2003)。

では組による葬儀とはどのようなものなのだろうか。組が関わる葬儀方法について自由記述で回答を求めた。表1は、結果を葬儀の主体別にまとめたものである。現在葬祭業者に一切をまかせている地域については、組で行っていた当時の葬儀方法について訊いた。表1によると、組での葬儀はおおよそ以下のような流れで行われる (行われていた)。



図3 現在の葬儀主体、および土葬・野辺送り実施市町村

組内で人が亡くなると、当家から組長（組合長、班長など）を通して組の各戸に連絡がまわる。指定の時刻に各戸から当家に集まり、組長を中心に喪主と相談しながら葬儀日程や役割が決められる。そして通夜の準備・実施、本葬の準備・実施とすすむ。その後、地域によっては翌日や初七日などに墓参り等を行う（3で後述）。

次に役割に注目してみよう。表1によると、葬儀における役割には以下のようなものがある。

- ・ 受付…弔問客の受付。香典を預かり施主に渡す。
- ・ 通夜および本葬の準備
- ・ 弔問客の接待
- ・ 諸手続き…死亡診断書、死亡届、埋火葬許可証。
- ・ 連絡係…「飛脚」とよぶ地域もある。寺社、親戚知人、新聞社等へ連絡を行う。
- ・ 賄い
- ・ 住職の送迎
- ・ 出棺係…土葬の場合は墓穴掘り、棺の運搬、埋葬を担当し、「床取り」「床掘り」「六尺」などとよばれる（2で後述）。火葬の現在では棺桶の蓋の開閉などを行うが、同様の名称が使われている。

前述のように、組での葬儀に代わって現在主流となっているのは組と葬祭業者がいっしょに行う葬儀である。その場合、上記の役割のなかに葬祭業者への連絡係が加わる。現在、葬祭業者のみで、あるいは組と葬祭業者で葬儀を行っている地域については、いつ頃まで組のみでの葬儀が行われていたか訊いた。回答を古い順に並べると以下ようになる。

昭和40年代（1965～1974年）まで：芳賀郡芳賀町

昭和61～62（1986～1987）年頃まで：那須烏山市南烏山地区、足利市月谷町

平成2（1990）年頃まで：宇都宮市富屋地区

平成7（1995）年頃まで：宇都宮市豊郷地区、芳賀郡益子町

数年前まで：下都賀郡藤原町

平成12（2000）年頃まで：栃木市吹上地区

都市部ほど葬祭業者への依存度が高く、農村地帯ほど組で行っている傾向がある（佐東、1983）とされるが、本調査の結果をみると、都市部でも現在も組で一切を取り仕切っている地域や、宇都宮市や栃木市のように比較的最近まで組による葬儀が行われていた地域があるかと思えば、芳賀郡芳賀町のように40年ほど前から葬祭業者の関与が高まっていたところもあり、単純に都市部、郡部で線引きはできないことがわかる。ちなみに芳賀町の回答では、「農協が葬祭事業を始めてから、組内と葬儀屋がいっしょに行うようになっていった。特定地域でなく町内全域がそうであった」と述べられている。組で執り行っていた葬儀に変化が起こったもっとも大きなきっかけは、都市部か郡部かの違いより、葬祭業者

表1 現在および以前の組による、または組と葬祭業者による葬儀方法

現在の葬儀主体	方法	市町村(五十音順)*1
組(2)*2	班長が分担し実施。	河内郡上河内町内全域
	自治会長が遺族代表と相談しながら取り仕切り、組内が中心となり葬儀を進行する。日取り、内容、方法は遺族の意向を中心に、自治会長がお寺、役場、病院等の連絡の役割を決め、組内の人たちに指示する。	塩谷郡藤原町旧三依村の一部
組、 組+葬祭業者 (9)	施主から班長へ葬儀のお願いをする。班長から組合へ知らせてもらい、集合して葬儀の日程、時間を決める。最近、ホール葬で行うことがある。その場合は葬儀屋さんにも交えて行う。この時大方の役割分担を決め役所へ正式の手続きを行う。自宅葬の場合、簡単な料理を仕出屋さんをお願いするようになってきた。寺へのお願い(寺との打ち合わせ、お布施の交渉、送迎は誰が行うか等)、通夜、告別式の受付、料理の配膳を組合が行い、葬儀の進行は葬儀社が行う。埋葬する場合は墓掘をする。	足利市毛野。大沼田町西根、中根、鷹巣、磯入、八柵町、毛野新町
	亡くなった後、施主と組合長と組合の人が全員で話し合い。①葬儀の日や通夜日、時間等を決める。②組合長を中心に役割を決める。③市役所等の手続き、お寺へ連絡。風習により飾り物等の準備する。④当日は婦人たちがお家手仕事を担当。	足利市地区の一部組合
	森友中組1組の場合…組内で担当。組内集合→寺への連絡→日程の決定→市役所への手続き→寺への依頼(布施持参)。講中および関係者への連絡(電話での飛脚)→必要物品等の調達。だいたい死亡日3日目に葬儀。葬儀では受付を担当する。	今市市。地区は不明
	葬儀を出す家がどのような方法でやるかを決定する。自宅ですべて行うか、葬儀屋さん一切まかせるか、併用か(通夜は自宅で葬儀は葬儀屋さんのホールで行う等)。組の中で長と呼ばれる方が組内に「ふれ」を出して、なるべく早い時間に会議を持ち、葬儀の日取り、役割分担を決める。だいたい夫婦(男女一組)で集まり、男性の役割、女性の役割分担を決める。男性は死亡診断書をもったり、斎場の手配、通夜、葬儀の日時をみなに知らせる仕事をします。女性は、まず枕膳をつくり、仏様の枕元に上げ、その後は、来客の接待、通夜、葬儀を自宅で行う場合は、料理等の材料の買出し、仕込み、食器の準備などを行います。当家の親戚の方々の接待等も当家の人たちに代わって行い、当家の人たちは、仏様のそばにいて心おきなく最後のお別れができるよう、一切の下働きをします。	今市市塩野室地区全域
	組長が組内の男女の役割分担を考える。	宇都宮市横川地区。組内で行うのは農村地帯が多い
	市役所への届出。お寺、神社へのお願い。セレモニー会館、自宅葬儀で違うところあり。ほとんどの人が会館でやってもらう。	鹿沼市南押原地区内全域
	隣組の組長か、その組の長老等が仕切る場合が多い。葬儀日程の決定、会場は通常自宅か地域の集会所(葬儀がしやすいように造られている。町が建設している)。特徴としては、銅山の街でもあることから、火葬してから通常午後4時ごろから告別式を行っている。	上都賀郡足尾町内全域
	死亡した家の住人が両隣に連絡し、その住人が自治会長(組の代表)等に連絡する。自治会長は、地域の状況又は、先例に従い組内の全員に連絡招集する。招集は概ね夜になるが、施主の意向を勘案し日時、場所(自宅かセレモニー)を決定するとともに組内の順番に従い役割を決定する(帳場、先松明、飛却、六尺等)。以後はすべて組の責任で実施。斎場の予約は葬儀屋が予約する例が多い。埋葬許可は組の人が行う(六尺担当)。神職者以外でも、矢又地区の数軒は神式で実施する例がある。	那須郡那珂川町全域
	町内全域で昭和40年代までは組内(俗に言うブラク)で行っていた。農協が葬祭事業を始めてから、組内と葬儀屋がいっしょに行なうようになっていった。特定地域でなく町内全域がそうであった。ブラク単位で行い、これを組合帳場と呼ぶ。葬儀屋が入るようになって単位がブラクから班へと小さくなっていったように思います。亡くなった家では、ブラクの総代さんへ死亡した旨を伝え、総代は何時に当座へ集合するよう「言継ぎ」を出す。指定された時間に当座に参集する。総代から当座に対し、ブラク全部か班で行うかを聞き、班だけの時は該当班は残り、他の班は帰る。班では葬儀日時などを当座と寺と火葬場の都合を聞き決定する。葬儀の日時がきまったら、埋葬、火葬許可を役場でもらう。その間に当座で行う場合には、食事の支度や葬儀に必要なものを用意する。土葬の場合は、帳場は総代や班長(1~2人)、床とりは土葬の時は墓穴をほる(2~4人)、その他の役割は指示により行う。1~3日葬儀にかかる。	芳賀郡芳賀町内全域

現在の葬儀主体	方法	市町村(五十音順)*1
組、 組+葬祭業者、 葬祭業者 (2)	1990年頃まで富屋地区全域で自宅で組ごとに行っていた。但し、上金井町は葬式組(特別にある)、徳次郎町門前は全所で、田中は上段、下段に分かれて行っていた。家族の逝去→その組の組長へ連絡→組内全戸へ連絡→各家族の代表が集合し、当家と相談し、葬儀日時などを決める→火葬場と連絡(組の人)→組内の人の役割を分担。前日まで張場(受付)、とことり(墓の清掃、埋葬の準備)、送り旗・かごなどの作成(全員で行った)、接待(お茶出し)。当日は張場、とことり、旗持ち、花をもつ、火葬場との交渉、接待。	宇都宮市富屋地区。組内での葬儀は少なくなかった。
	班内で班長が葬儀委員長になり自宅葬ということで執行していた(班内の各人が役割分担)。人が亡くなった場合、班長がその家の希望を聞き班内一同を召集し役割分担を決定して行っている。	小山市間々田5丁目の一番地区
組、 葬祭業者 (1)	①当家から組の班長に死亡者の連絡があったら、班長は組内の全戸に死亡の旨と、集合時間を告げるとともに集落全戸に連絡する。②組内の各戸から男女1名ずつが当家に集合して、葬儀の日程や内容について相談する。③男性の二人が死亡届の提出やお寺に相談に行く。さらにほかの二人が葬儀用品の買い物に行く。残りの人は雑用を行う。女性は食事などのまかないを行う。④通夜のときは、住職の補助や入棺の手伝いを行う。⑤葬儀当日は、会葬者の受付や反礼品の渡し、その他行う。	さくら市喜連川。市街地では葬祭場で、周辺地域では当家(組内)で行う場合が多い。
組+葬祭業者 (19)	亡くなった知らせ→組長(班長)が組全員に周知→当家に集合(夜)。日程、大役(墓を掘る人。現在は墓穴を掘ることもない)等の役割を決める→通夜(受付、お返しを配る)→葬儀(受付、お返しを配る等)一切を行う。※最近では、組合では親戚等の数がかみず、食事、通夜のお清め、本膳等の人数、また手配まで施主に任せることもあるようだ。	足利市織姫
	無回答	足利市久野。久保田町、瑞穂野町、野田町
	班長さんたちが中心になりますが、班長さんが若く経験不足の時には長老が中心となります。市役所への手続き、寺院との日程確認、斎場への予約、料理の手配等分担任して協力的に行う。	足利市毛野
	現在では、核家族の世帯が多く葬儀のやり方も簡素化傾向になり、隣組の人と葬儀屋が一緒に行っている地域が多いと思います。	足利市助戸
	死亡届の提出、お寺との打ち合わせ、通夜式、告別式のお手伝い(受付や接待など)を組内で分担している。葬儀を執り行う家庭により、また葬儀屋のやり方により差がある。	足利市葉鹿
	組内-葬儀の日取り内容について家族とともに決める。市役所への届出。親戚への連絡。台所は組の女の人を取り仕切る。葬儀屋-お通夜から出棺まで行う。総合的に執り行うのは組内の方。	宇都宮市篠井地区。篠井町、石那田町、下小池町、上小池町、飯山町
	約10年前から葬儀屋が行うようになった。5年くらい前から葬儀屋が中心になりつつある。組長が中心になって葬儀屋と相談しながら行う。組内の人は、①お寺に行く、②葬式の日時等を知らせる(新聞社や、親戚など)連絡係。大体のことは葬儀屋が行う。人が亡くなると先づ組の長(1~2年交代で行う)に連絡。組長が当家に集まるよう組員に連絡。当家の意見を伺い役割分担などを決める。役割は、①お寺へ行く人、②役所へ行く人、葬儀許可やいつ火葬にするか葬式の日どりを決める、③受付、④会計。庶務を誰がやるか、⑤女達の手伝いなど。だんだん葬儀屋がやる事が多くなり、組内の手伝いは薄らいできた。	宇都宮市豊郷地区。
	施主と組内の代表者が、葬儀全体のスケジュール、何を組内にお願いするかなどについて打ち合わせをします。組内は代表者を中心として、誰が、何を分担するか決めていきます。分担は、おおよそ受付、接待、床取り(昔の墓堀担当)などです。	宇都宮市瑞穂野地区概ね全域
	①亡くなった後、その日の夜、施主の方の家に集まって組内の班長がしきって行う。②役割分担を決めてそれぞれ指示する(火葬場の予約、死亡届、お寺への連絡)。葬儀屋との打ち合わせを行う。通夜の準備。③当日は告別式、出棺、火葬、自宅にて組内と身内でお清め、解散。	大田原市の全ての地区
	亡くなったあと、班内の人たちが死亡届を出張所(休・祭日は市役所日直)に届け、そこで火葬の予約ならび埋火葬許可証をもらう。自宅で葬儀を行う場合は、家族、班内の人たち、葬儀屋さんと段取りを決め、班内の女の人たちは料理を作ったり、お茶入れの手伝いをする。男の人は帳場を手伝ったり、力仕事をする。	小山市絹地区
	行政の組合と冠婚葬祭の組合があり、冠婚葬祭の組合に、亡くなった家の両隣二家が責任を持って連絡し、組合に分担して女性には当家の台所の依頼。	鹿沼市板荷

現在の葬儀主体	方法	市町村 (五十音順) *1
組＋葬祭業者 (19)	死亡から通夜まで：斎場の予約、宗教によって違うが住職等への連絡、死亡届の提出、枕飾り (団子・ご飯など)。通夜：住職の送迎、通夜の弔問客の受付、接待、通夜の参列。葬儀当日：住職の送迎、弔問客の受付、接待、お墓への納骨、精進おとし (ひあげ)。	鹿沼市北大飼上。石川、茂呂、白桑田、松原、深津、下石川、池ノ森。
	当家、組内、葬儀屋の話し合いにより役割分担が行われるが、現在は専用のホールで行われることが多く、大半の役割を葬儀屋が担っている。	上都賀郡栗野町
	死亡の日、故人宅に組内の人全員が集まり葬儀の日時、段取りを決める。その時分担を決める。	上都賀郡西方町全域
	現在は、自宅葬でもほとんどが業者に委託をし、その補助的な手伝いがほとんどである。地域の違いというより、当家の意思により自宅葬、ホール利用等それぞれいる。	塩谷郡塩谷町
	現在はほとんど葬儀屋と組内と一緒に葬儀を行っていますが、当家の意向もあり、どこまで葬儀屋が行うかは様々です。地域、宗派によって相違があるそうですが、誰が帳場や床取りを行うかなどは組内の順番で決まっているようです。	塩谷郡高根沢町内ほとんど
	無回答	那須烏山市烏山地区
	死亡→市町村役場に死亡届提出 (当家または組の人) →お寺 (組の人) →葬儀の日取りなど組内の方で決め通知をする (組の人)。通夜の準備 (組の人) →通夜 (当家) →本葬儀	芳賀郡市貝町小貝地区、塩田地区、見土地区
組＋葬祭業者、 葬祭業者 (3)	10年ぐらい前に町内に葬儀場ができたため、自宅葬が少なくなった。それまでは、組内だけでの葬儀が多かった。亡くなった後、できるだけ早く組内の人々が朝か夕方集まり当家も入り相談する (日取りや会場について)。相談した次の日、葬儀の準備を組内の人たちが行う。葬儀の前日夕刻、納棺後通夜 (自宅または葬祭場)。葬儀当日組内と葬儀屋で葬儀、告別式を執行。	芳賀郡益子町内のほとんどの地域
	昭和62年位まで隣組単位で行っていた。家族が亡くなると家人が隣組長へ連絡。隣組長は隣組員へ連絡する。隣組員は、葬儀のある家へ集まり、隣組長を中心に葬儀日程等を喪主と相談し決める。隣組員は寺等に連絡し、葬儀の場所、日時等を決める。市役所へ死亡届を出し、火葬許可を受ける。市斎場の予約を取る。通夜、告別式における受付を行う。	足利市月谷町菅沢
	組合 (班) の人が死亡すると、①まず、おくやみに各戸1人ずつ行って、葬式の日どり (死亡届) などを決める。葬式の前に葬列のかざりなどを作り、準備する。②葬儀の日は1戸2人位ずつ出て、奉仕。火葬場、葬地まで行く。受付は香典の預り、計算して施主に渡す。③墓ほり (今ではお墓の附かんのふたの開閉など)。墓ほりは当番制。④葬儀の翌日は、初7日の墓参り、各戸1人づつ出て終了。組合の人は受付のみ手伝う。	佐野市赤見町市場上町地区O班
葬祭業者 (4)	地域というよりその個人の家によって違ってくる。葬儀屋に任せる部分が大きいが自分の家で葬儀をやる家もあり、このような場合は組内の働きも大きくなる。葬儀屋に葬儀一切をたのんでいるところもある。	真岡市
	数年前までは、自宅。班 (隣保班)。①親戚などの代表者が全般の指図にあたる。②それに随って通知・手続・その他を分担する。女子は炊事に。	下都賀郡藤原町
	平成10年～平成12年位までは不幸のあった自宅葬儀で組内 (自治会の班) が帳場係・庶務係 (親戚への連絡・寺への連絡・買物等を担当する) を決めて行われていた。葬儀を行った単位は原則として不幸のあった隣組 (自治会の班) が主体で、地域によっては隣接する1～2の隣組 (自治会の班) が手伝いに行くところもあった。人が亡くなると当家より班長に亡くなった旨連絡があり、班長は班内各戸に当家に何時に集まってはしと連絡し全員が集まったら、その班の最後に葬儀を行った家で保管していた記録簿に依り各班員の役割を皆で相談して決める。役割は帳場係 (受付係)、出棺係 (自宅から葬儀屋へ行くとき、葬儀から火葬場へ行くとき墓地に納骨する)、亦、市役所親戚親友に連絡する庶務係、必要買物等を皆で協力して行う。祭壇の飾り付け住職の読経、焼香、出棺 (土葬のときは墓地へ、火葬のときは霊柩車で火葬場へ)。埋葬又は納骨後当家に戻り、35日の墓参りに再度墓地へ行く。	栃木市国府地区 (旧国府村)
	5年前くらいまでは組内で行っていた。役所へ斎場の手続き、お寺との連絡、だんご・おぜんづくり。親せき、知人等への連絡係。通夜の準備。葬儀の当日の係決め。竹取り。墓の清掃 (床取り)、帳場・斎場のまかない。祭主の送迎、亡後の墓参り (7日間)。	栃木市吹上地区
葬祭業者 (4)	20年程前までは、旧南那須町内全域で、組内での葬儀を行っていた。①組内全員集まり、日程の調整を行う。②通夜及び納棺を当家、組内で行う。床掘りを組内で行う。	那須烏山市南那須地区

\*1 調査後、市町村合併した地域もあるが、調査時点の市町村名で記載した。

\*2 カッコは回答数



の登場、とりわけ斎場の建設にあると考えられる。

では地域における葬祭業者の登場や斎場建設により一様に葬祭業者の関与が高まっていくのかというと、必ずしもそうとはいえない。なぜなら、近隣に葬祭業者が存在する地域でも、葬祭業者のみで行っている地域、組と葬祭業者がいっしょに行っている地域に分かれるし、組と葬祭業者がいっしょに行っている場合も、地域や家、自宅葬か斎場葬かにより葬祭業者の関与の度合いは異なるからである。組と葬祭業者の関与の度合いは大きく分けると以下の2つに整理できた。

①組主導ですすめ、葬祭業者は主に告別式等の進行を担当する。

※以下に記した例は回答より抜粋。以下同様。

例／施主から班長へ葬儀のお願いをする。班長から組合へ知らせてもらい、集合して葬儀の日程、時間を決める。最近、ホール葬で行うことがある。その場合は葬儀屋さんも交えて行う。この時大方の役割分担を決め役所へ正式の手続きを行う。寺へのお願い、通夜、告別式の受付、料理の配膳を組合が行い、葬儀の進行は葬儀社が行う。  
(足利市毛野)

例／組内は葬儀の日取り内容について家族とともに決める。市役所への届け出、親戚への連絡。台所は組の女の人を取り仕切る。葬儀屋はお通夜から出棺まで行う。総合的に執り行うのは組内の方。  
(宇都宮市篠井地区)

例／班内の人たちが死亡届を出張所に届け、そこで火葬の予約ならびに埋火葬許可証をもらう。自宅で葬儀を行う場合は、家族、班内の人たち、葬儀屋さんと段取りを決め、班内の女の人たちは料理を作ったり、お茶入れの手伝いをする。男の人は帳場を手伝ったり、力仕事をする。  
(小山市絹地区)

②葬祭業者主導で行い、組は補助的な手伝いを行う。

例／現在は専用のホールで行われることが多く、大半の役割を葬儀屋が担っている。  
(上都賀郡栗野町)

例／現在は自宅葬でもほとんどが業者に委託をし、その補助的な手伝いがほとんどである。  
(塩谷郡塩谷町)

このように葬祭業者の関与の度合い、組と葬祭業者の役割分担は地域によってさまざまである。寺石ら(2000)は斎場葬への移行の地域差を生む要因として宗教観、寺院の影響、親族や地域の結びつきをあげているが、これらはそのまま葬祭業者の関与の度合いの違いを生む要因でもあろう。その他、組主導で行われている理由として、葬祭業の性格が曖昧で業者自身がどこまで関わればよいか逡巡している面がある(佐東、1983)ためともいえる。そもそも、葬儀に関わる業者は、葬儀屋、葬儀社、葬祭業者などとよばれる。福澤(2002)は、葬儀屋は主として祭壇の貸し出しや遺体の搬送を請け負う業者、葬儀社は自前の斎場を備えた業者と両者を区別している。葬祭業者の職域および呼称の多様性を生

む背景にあるのが、葬祭業者の成立過程である。明治期の葬儀屋の元々の任務は棺桶や造花、仏具といった葬具の調達、および葬列人足の手配にあったが、大正期に入って葬列が廃止され業務の大部分を失うと、親族や地域が担っていた仕事を取り込む形で業務を多様化していった(村上、2001)。栃木県内の葬祭業者のなかにも〇〇造花店という社名が少なからず含まれており、葬祭業者の成り立ちを彷彿とさせる。なお本稿では、福澤の定義による葬儀屋、葬儀社両者の意味を含む意味で葬祭業者という呼称を用いている。

葬祭業者の葬儀への関与に話を戻そう。関与の度合いの違いを生む要因のひとつとして、佐東(1983)は地域ごとに引き継がれてきた風習があることをあげている。すなわち、組の人々が弔いに関する風習を引き継ごうとし、葬祭業者がそれに合わせるならば組主導の葬儀が続くであろうし、組の人々の風習に対する意識が低ければ、あるいは葬祭業者が地域に合わせようとしなければ葬祭業者の関与が高まっていくであろう。

一方、葬祭業者に一切をまかせる、あるいは葬祭業者主導で行われている理由としては、一式やってくれる葬祭業者が便利だから、動揺しているので葬祭業者に仕切ってもらう方がいいから(深江、2005)といった理由があげられる。また、勤め人には葬儀の役割を担うのは大変である(月刊消費者、2003)、葬儀の手伝いの簡素化を進めてほしい(星野、1999)といった葬儀への負担感を訴える意見も寄せられている。とりわけ食事の世話、掃除、宿泊者用の布団の手配などにかかりっきりになる女性側の希望が強い(碑文谷、2002)という。そもそも、高齢化、若い世代の転居、新住民への気兼ねといった労働力不足の問題も横たわっている。

以上をまとめてみよう。葬祭業者の関与差を生む要因には、集団的要因として地域の結びつき、寺院の影響、地域の風習への態度、労働力、個人的要因として宗教観、ライフスタイル、負担感、そして両方に関わる要因として葬儀の場所、合理性や安心感を求める心理をあげることができる。

## 2. 土葬と野辺送り

かつて日本では一般的に土葬が主流で、1900年の火葬率は約29%であったが、近代化の過程で火葬が急速に普及し、1993年には約98%に達した(森、1999)。では栃木県内においては土葬はどの程度行われているのであろうか。本調査では以下のような回答が得られた(カッコは回答数。図4参照。現在行っている地域については図3参照)。

- ①現在も土葬を行っている地区がある (5)
- ②現在土葬を行っている地区はない (36)
  - 以前は土葬を行っている地区があった (29)
  - 以前も土葬を行っている地区はなかった (0)
  - 以前についてはわからない (7)

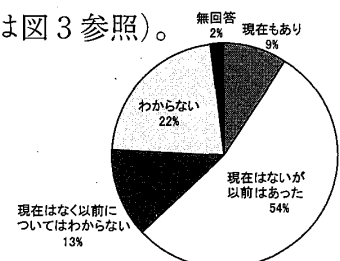


図4 土葬の実施有無

③わからない (12)

④無回答 (1)。

表2は、現在および以前の土葬による葬儀方法である。以前行われていた地域については、いつ頃まで行われていたか回答を求めた。その結果、小山市間々田地区のように戦前途絶えた地域もあれば、上都賀郡栗野町や今市市塩野室のように2～3年前まで行われていたという地域もあり、地域によってばらつきが大きかった。

土葬と火葬による葬儀の違いとして、①墓穴を掘る役割の有無、②葬儀の流れ、③野辺送りの有無があげられよう。②③については項を改めて取り上げるとして、①の墓穴を掘る係についてみていこう。回答によると、墓穴を掘る人は「床取り」「床掘り」「六尺」などと呼ばれる（以下、「床取り」と記載）。土葬の方法は地域によって若干異なるが、表2の回答をまとめるとおおよそ以下になるよう。

「床取り」の仕事は墓穴掘り、棺の運搬、埋葬で、2～4人1組で務める。特定の人が務めるのではなく組内の男性が交代で務め、葬儀の打ち合わせの際、だれが行うか決定する。墓穴は葬儀の前日または当日に掘る。穴の大きさは縦4尺×横6尺×深さ6尺など棺桶が入る程度である。スペースが少ないときは縦長の棺桶に座禅の姿で収める地域もあった。納棺が終わると棺を「床取り」が4人でかついで、またはリヤカーで引いて墓地まで運ぶ。「床取り」が棺桶の4隅につけた麻縄を持って墓穴に入れる。麻縄は引くと抜けるようになっている。参列者が土を投げ入れるなどしたあと、「床取り」が本格的に土をかぶせる。埋葬に使用した麻なわを近親の妊婦にあげ、安産のお守りにする地域もあった。埋葬後「床取り」は寺または喪家で風呂や酒で清めを行い、食事がふるまわれる。

上都賀郡栗野町の回答によると、土葬の墓の形態やお供え物等は以下のとおりである。

例／トコホリがシャベル等で埋め、土を盛り上げる。これを土饅頭と呼ぶ。土を盛り上げる際に、提灯・旗・辻口ウ・棺台などを一緒に埋める。その上に六角仏をさし、棺の頭部に墓標を埋め込み、その前に霊膳を供える。マクラ石と呼ばれる自然石を置くところもある。その上からサヤを被せ、墓場に持参した葬具を墓の周りに置く。

(上都賀郡栗野町)

次に野辺送りについてみていこう。野辺送り実施の実態は以下のとおりである。土葬よりも多くの地域で行われていることがわかる（図3、図5参照）。

①現在も野辺送りを行っている地域がある (12)

②現在、野辺送りを行っている地域はない (11)

（ 以前は野辺送りを行っている地域があった (9)

以前も野辺送りを行っている地域はなかった (1)

無回答 (1)

③その他 (2)

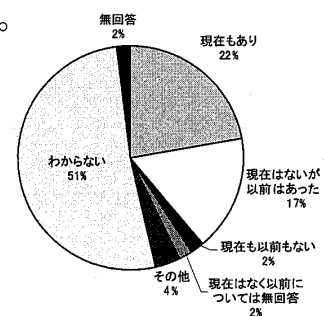


図5 野辺送りの実施有無

表2 土葬の方法

土葬実施 有無	方法	市町村 (五十音順) *1	いつ頃まで
現在も行われている (5) ※2	森友中組 (中講中) の場合、自宅 (僧が来て読経) → 寺 (葬儀) → 墓へ埋葬する (森友は両墓制)。出棺までに床取り4人で穴を掘る。穴掘人を床取りという。講中20軒余の中から組 (5~6軒) 及び親類を除いた中から当日の都合も聞いて回数少ない順に4人を決める。回数は床取り帳へ記録する。タテ、ヨコとも棺より少し大きめに約2m深く掘る。リヤカー型の霊柩車で床取り4人が運ぶ。一般会葬者は寺での葬儀で帰り、墓は親類、講中だけが参列する。棺を穴に下ろし、親類縁者が一握りの土くれを入れたのち、床取りの人が埋める。葬列は弔旗、鐘を先頭に施主等が持ち物を持って従う。親類縁者の女性は霊柩車に結んだ縁綱 (エンズナ、サラシ) を引く。	今市市。地区はわからないがまだあると思う。平成14年3月の大室の葬儀は土葬。森友中組では約10年前まで土葬。現在でも施主が望めば可能だが講中の負担を考えれば無理だろう (床取り依頼などで)。	
	無回答	那須烏山市烏山地区	
	穴を掘って柩を埋め土を盛り上げる。	芳賀郡市貝町全域	
	無回答	芳賀郡芳賀町	
	火葬と同じように行っているが、土葬の場合は自宅葬が多い。床取りの4名が墓穴を当日掘り埋葬する。葬儀の後、床取り4名により、棺を霊柩車に乗せて遺族、親族代表があいさつし出棺する。出棺の時、散銭をする家もある。親族は霊柩車の前の縁の綱を引いて墓まで行く。	芳賀郡益子町。地域としてはないが、唐櫃 (かろうど) のない墓の人は土葬にしている。	
現在は行われていないが、以前は行われていた (29)	棺桶は座棺で仏様 (亡くなった人) は胡座の状態。年番当番 (組合内以外…他の組合) が墓を掘る。墓を掘る人は2人で朝から埋葬が済むまで寺にいて組合が運んでくれた食事 (昼食) をする。墓を掘った後、埋葬がすんだ後は寺の風呂に入る。掘る時は半天 (寺に用意してある) を着る。※火葬になってから30年程前まで、年番当番が墓を掘り、風呂、食事を寺で行っていた。現在はカロートになっていることがほとんどで、組合の内から2人程で行っている。	足利市大沼田町、西根	50~60年前
	遺体は寺にあった霊柩車 (人力) で運んだ。墓穴を掘る人=大役 (4名)、隣組に頼んだ。参列者は親族、親戚、組合。棺桶の上に土を盛り、竹細工で飾った。	足利市織姫	わからない
	床掘りは棺にあった穴を2m位掘る。親族、隣組、僧侶等。	足利市久野地区 (久保田町、瑞穂野町、野田町) の各集落	昭和40年頃
	無回答	足利市月谷町芹沢	昭和30年代
	墓穴を掘る人は「床掘り」と呼ばれ当番制です。墓の掘り方はその家の墓地のスペースにより余地があれば横長の棺、余地が少ない時には縦長の棺に遺体は座禅の姿の様に座らせて収めた。家を葬列をくんで出発し、寺の境内で三周し本堂に上がり回向。最後は床掘りの人や組内の人が土をかけた。	足利市常貝町	昭和32年前後
	①組内の人が遺体の棺をかついで (4人) 寺の墓まで。②墓穴を掘る人も組内で交替して掘った。「とこほり」は別にお清めが出ました。③参列したのは親族、組内で親交のあった人。	足利市梁田地区全域	昭和20年代初め頃
	遺体の埋葬を行う担当の名前は「ろくしゃく」と呼ばれ、4人があたります。この名前は、穴を掘る深さが六尺だったことからついたのではないかと思います。ろくしゃくの人、順番で決められ、葬儀の打ちあわせをする集まりの時に決められます。葬儀の前日に穴を掘る (縦四尺×横六尺×深さ六尺)。納棺が終わると4人で棺を墓地までかついで行く。棺の角々に麻なわがつけてあり、引くとぬけるようになっていく。4人一齊になわを持ち穴に入れる。麻なわを引く。弔いの式のあと、遺族の人が交代で土をかけろくしゃくの人が仕上げをして、墓を完成させる。墓から帰ってきたら、当家で、4人のろくしゃくの人に接待をする。埋葬に使用した麻なわは安産のお守りといわれ、近親の妊婦さんにあげた。	今市市塩野室地区全域	2~3年前

土葬実施 有無	方法	市町村(五十音順)*1	いつ頃まで
現在 は行 われ てい ない が、 以前 は行 われ てい た (29)	<p>部落内の寺役が寺に関する色々な仕事を分担して当った。その中の1つに死体をついでたり、墓穴を掘ったりする「とことり」という役があった。とことりは4人で1組になり、葬式の時、当家から寺まで死体を運び、寺につくと本堂の前に竹の柱4本を立てる。これを四門(しもん)という。四門を左まわりに3回まわる、順序は沸(死人)、僧(1人のとき、2人のとき、3人のときを半なりといい、僧が6人になると本なりという)。後に沸に関係深い人が続く(当家、親せき、友人、知人、組内など)。四門を廻りながら経をよみ、妙鉢(みょうはち)で、じゃらーんと音を出し、太鼓でボンと音を出すので葬式の事をジャンボヌ、ジャーボという。終わると本堂で葬儀を最後の別れに棺おけに釘を親戚が交代で打つ。墓穴は前日とことりが四角(長方形、深さ1.5m位)に掘っておく。寺から出ると竹かごに入れておいた小銭をばらまく。それをひろうと長生きするといふ。いよいよ墓につくと「とことり」が死人を墓入れへ入れる。土をかける前に参列した人達で小さな土をつかんで投げ入れる。その後「とことり」が本格的に土をかぶせる。死体の上に棺桶が入ってあった飾りがのせてある。墓から葬式を出した家に戻り清める(酒と、塩とかつおぶしを使う)。家ではとことりをはじめとして組内の男達や手伝いの女達も慰労される。それをするのは親族などが行う。また親族は金を出し合い組の男女それぞれに礼としてさし出す。この方法は戦前までで終わったようです。</p>	宇都宮市豊郷地区(長岡地区)	20年ぐらい前
	<p>組内の軒数が少ない所では、講中と言って(葬式組)協力班がある。墓穴は当日の朝(前日の所もある)棺桶4尺4寸が入るように掘る。背の高さ位に掘る。掘った後は、穴の囲いに杉の葉(棘げ棘げがあるので)を刺しておく。誤って穴に落ちないようにするため。掘る人の呼称「床とり」4人で行う。掘り終わった後、お墓で組内の女の人が用意した清めをいただく。床とりが担いで(リヤカーに乗せて)家を出る。その際、編んだ花籠に入っている小銭を撒く。告別式に参列した方は、大半がお墓に行った。</p>	宇都宮市篠井地区(篠井町、石那田町、下小池町、上小池町、飯山町)	概ね10年ぐらい前
	<p>運搬、穴掘り、埋葬は「とことり」の仕事。運ぶのは昭和20年代頃はとことり4人でかつぐ。30年代頃からはリヤカーに棺をのせて運ぶ。穴の形は棺の入るだけの穴で長方形、深さは2mくらい。儀礼としては棺が墓に到着後すぐに穴の底におろす。僧侶、神官が儀式を行う。全員が少しずつ土をかける。「とことり」が完全に埋める。参列者は葬儀に参列した全員が参列。</p>	宇都宮市富屋地区全域	1985年頃までか
	<p>①お寺に置いてある霊柩車にお柩を入れて車を引いて運びます。②組内から「床とり」と呼ばれる人が選ばれ掘ります。③4人ぐらいの人が、スコップで交代で掘っていきます。最後埋めます。④組内、町内の人はおしらせがあったらおくやみにいきます。組内の人は葬儀を分担して行います。⑤親族の他は組内、町内の人です。</p>	宇都宮市瑞穂野地区全域	わからない
	<p>組内の人が荷車に乗せて運んでいた。</p>	宇都宮市横川地区	40年ぐらい前
	<p>①遺体は組内の人が墓地へ運ぶ。②組内の人が墓穴を掘る。③床立て人。④掘り方には決まりはない(棺が入る程度の穴を約2m位)。⑤墓地に親族身内、会葬者が集まって行く。⑥自宅に戻ってご焼香、住職の説法を聴く。</p>	大田原市	およそ15年ぐらい前
	<p>床取という当番があり(5人)、墓穴掘りからすべて一切当番が行った。これは町内全員対象で床取り帳というものがあってそれに依って選出していた。</p>	小山市間々田地区	戦前(昭和の初め)
	<p>無回答</p>	鹿沼市北犬飼。上石川・茂呂・白桑田・深津・下石川・池ノ森	わからない
	<p>遺体は隣組、身内の人が運ぶ。墓穴は隣組の人が掘る。参列は遺族、親せき知人、友人。</p>	鹿沼市南押原地区。以前は地区内全体	わからない
	<p>無回答</p>	上都賀郡足尾町。足尾町餅ヶ瀬、唐風呂、野路又	わからない

土葬実施 有無	方法	市町村(五十音順)*1	いつ頃まで
現在は行われていないが、以前は行われていた(29)	トコホリによって掘られた墓穴に北向きに棺を納める。一軒の家で1年に2人死者が出た場合には、2度目の埋葬の時、審人形を作って棺と一緒に埋める。近親者から土を掛け、参列者全員で土を掛ける。トコホリがシャベル等で埋め、土を盛り上げる。これを土饅頭と呼ぶ。土を盛り上げる際に、提灯・旗・辻ロウ・棺台などを一緒に埋める。その上に六角仏をさし、棺の頭部に墓標を埋め込み、その前に霊膳を供える。マクラ石と呼ばれる自然石を置くところもある。その上からサヤを被せ、墓場に持参した葬具を墓の周りに置く。	上都賀郡栗野町全域	平成14年が最後の例。それまで漸減が続いていた。
	土葬の埋葬は、遺体を組内の床取りという人を決め運び、その床取りの人が墓穴を掘って埋める。墓の掘り方は棺桶が入る大きさにスコップ等で掘る。親戚・身内・組内の人が参列する。	上都賀郡西方町大字本郷田谷地区	平成12年
	班の割り当て分担で実施	河内市上河内町全地域	昭和30年代頃
	集落において家並の順送りによる「床取りさん」と呼ばれる4人が遺体を運んだり墓穴を掘ったりした。掘り方は、棺桶が入る程度の穴をスコップ等で掘った。埋葬には当家の家族の他、親類縁者や集落の親しかった人たちが参列した。	さくら市旧喜連川町	昭和47年広域行政組合の火葬場ができるまで
	どのように遺体を運ぶのか：手の葬儀車。誰が墓穴を掘っていたか：班の上の組織。町～区の人達の順番。墓穴を掘る人の呼称床掘(トコホリ)。墓の掘り方：シャベル等。埋葬前後の儀礼：埋葬後はその晩急を唱える(組合の人達)(13沸)。食事は施主(調理は組合の人)の依頼で前日と当日出す。	佐野市赤見町	昭和25年頃
	六尺という4人で墓穴を掘っていた。又遺体を運ぶのは遠い所はリヤカー等で運んでいた。身内を始め組内、その他多数の人が参列していた。	塩谷郡塩谷町。地域より当家の希望により	平成11年頃まで少数ではあるが行っていた。
	遺体を運ぶ一棺桶、墓穴一陸尺、掘り方スコップで岡から掘り上げる(中へ入らない)、埋葬前後一清め酒	塩谷郡藤原町。旧三依村、藤原町・高德・小佐越地区・大原地区・藤原・川治	平成10年(旧三依村)、高德・小佐越地区・大原地区(昭和45年)
	地区共有の霊柩車で墓地へゆく。地区の順番で墓掘り当番があった(床掘り)。出棺の折、行列を作って三回半まわる、撒金をする。親類のほかは意志による。	下都賀郡藤原町全域	30年ぐらい前
	遺体の入った柩を霊柩車又は、リヤカー等に出棺係が乗せて墓地へ運んでいく。墓穴は班内の記録簿を見て、出棺係をやった数の少ない順番に班内の戸数により2～4人の出棺係を決める。出棺係は当家に墓穴を掘る場所を決めてもらい、埋葬の前日、柩の寸法より縦横共60cm位大きく又深さは1.2m位に掘って穴の周りに杉の葉を差しておく。柩を墓穴に入れ、寺の住職が読経後親戚・友人班の人々が土又小石を柩にかけた後、出棺係がジョレンで穴を掘った土をかけて穴を埋め戻す。埋め戻しが終わったら埋葬者全員で花をあげ線香をあげて埋葬終了後、墓地入口にて清めを行う。清めは、清め酒・カツヲ節・塩にて行う。	栃木市国府地区(旧国府村)全域	平成2～3年頃
	無回答	那須烏山市南那須地区。旧那須町全域	20年ぐらい前
	講中の役割で「六尺」担当が葬儀前日に墓地(個人と共同墓地の場所もある)に下図のように穴を掘る(六尺と呼ばれる理由)。遺体は棺に入れ、更に鞘、方言で「ガンバコ」に入れ墓地へ「六尺」が運ぶ。墓地まで運ぶ。六尺担当が棺を穴に下ろし、参列者が土を埋戻す。	那須郡那珂川町全域	斎場は昭和53年に建設されたが当時は利用が低く、平成になった頃より土葬はなくなった。
	亡くなったとき魂呼び。末期の水、近親者が行う。枕飯、死人の分だけ飯を炊いて、お椀に山盛りにしてはしを真ん中にたてる。神棚や床の間には白紙を貼る。通夜、葬儀前夜に死人と最後の夜とともに過ごす。葬儀はジャンボ、ジャンボンと呼ばれる。組内から帳場を決め、一切を指揮する。告げ人、寺使い、買物使い、賄い、等組内で行う。床取り、墓穴掘りと棺担ぎの二役をする。4人一組で組内の人が順番で行う。等いろいろあり。昭和50年代で、土葬と火葬が半々くらいでした。	真岡市。都市部以外	昭和50年代

\*1 調査後、市町村合併した地域もあるが、調査時点の市町村名で記載した。

\*2 カッコは回答数

④わからない (28)

⑤無回答 (1)。

表3は、以前または現在の野辺送りの方法である。「集落の人々が家の門口から墓場までの道々で死者をおくります」(宇都宮市瑞穂野地区)という回答にあるように、野辺送りは遺族や親戚だけでなく地域の人々で死者を見送るものであった。遺体は「床取り」が荷車などに載せ運んでいた。葬列の列順と役付けは上都賀郡栗野町の回答に詳しい。

例/辻口ウ(組内の者)、鉦(組内の者)、提灯(近親者)、竜タツ(兄弟など)、四本旗(組内の者)、花籠(兄弟など)、香炉(近親者)、生花(孫など)、杖(孫など)、手燭(孫など)、位牌(施主)、霊善(施主の妻)、ゼンノツナ(近親者の女性)、棺(組内の者)、天蓋(近親者)、一般参列人。(上都賀郡栗野町)

他の回答も合わせると葬列は以下のようなだろう。組の人などが鉦を打ち鳴らすなか、松明、高張、旗、花籠、香炉、生花をもつ組や近親者の後に、位牌や遺影を手にした近親者、組の人が運ぶ棺、最後に一般の参列者が続く。上記の回答にもあったように、善の綱といって、棺の前方に取り付けた白布を近親者の女性や子どもが引いて先導する地域もあった。また、竹籠に入れた小銭をまく地域もある(あった)(今市市塩野地区、宇都宮市富屋地区・豊郷地区など)。

こうしてみると、鉦の音を鳴らしながら、近親者のみならず、組の人や一般参列者が旗や花籠、提灯、香炉、生花などを手に隊列を成して練り歩く「賑やかな」葬列であったことが伝わってくる。ジャンボ、ジャンポンと呼ぶ地域があった(真岡市)のも理解できる。ちなみに、ミオクリ(さくら市喜連川)、カド送り(鹿沼市南押原)と呼ばれていた地域もあった。いったいなぜこうした「賑やかな」葬列を組んで見送ったのであろうか。波平(2003)は、「ここには遺体がある」と周囲に固辞しつつ墓地へ向い、死者と生前無関係だった人々の注視を浴びる効果を生むのが野辺送りの大きな要素であると述べている。

現在は行われていないが以前は行われていた地域については、いつぐらいまで野辺送りが行われていたか訊いた。

昭和30年代まで：河内郡上河内町

40年ぐらい前(昭和40年頃)まで：宇都宮市横川地区

昭和50年代まで：真岡市

昭和60年代まで：那須郡那珂川町

20年ぐらい前(昭和60年頃)まで：宇都宮市豊郷地区

平成2～3年頃まで：栃木市国府地区

10年ぐらい前(平成7年頃)まで：宇都宮市篠井地区など

表2と比較するとわかるとおり、すべての地域で土葬と同時期まで野辺送りが行われていたことから、火葬への移行に伴い野辺送りも省略されたといえそうだ。言い換えると、

表3 現在および以前の野辺送りの方法

野辺送り 実施有無	方法	市町村(五十音順)*1	いつ頃まで
現在も 行われている (11)*2	告別式終了後、火葬が済んだ時、自宅で告別式を行った場合は自宅から墓地まで、親族・隣組等が隊列を組んで行く。役割は宗派によって異なる。最近では、車で墓地に行く場合、葬祭場から直接墓地へ行くこともある。また、納骨を告別式後、一週間位してから親族だけで行くこともある。	足利市久野地区(久保田町、瑞穂野町、野田町の各集落)	
	野辺送りは、火葬と告別式の順番によって異なる。告別式が後になった場合、自宅から寺までおねりして来る。その際、施主は位牌を持ち、その他のもの、お骨、七本木、杖、お膳等、家族・親戚が役割分担してくる(西根の場合、墓は寺にある)。住職の先導で組合の人が楽器を持って、住職の引鑿、銅鑼、妙鉢を1回ずつ鳴らしながらおねりして来る。本堂の前で時計と反対回りで3回半回って本堂に入る。※七七忌埋葬が多くなっている。その場合、墓標は使わず、墓誌に戒名・俗名等を七七忌までに刻む。	足利市大沼田町西根	
	野辺送りは葬儀の一部で、霊柩車が出発するのを参列者全員で送る。以前は(20年前位か?)送り旗を立て、竹でアーチを作り、籠に入れた花(紙)や小銭をまくのを組内の人たちが分担。火葬場まで行く人(親族、親しい人たち、組内など)はその足で墓地へ。	宇都宮市富屋地区全域	
	土葬の時代、告別式が終わると、家から墓場まで柩を霊柩車で運びますが、集落の人々が家の門口から墓場までの道々で死者を送ります。現在行われているものが野辺送りなのかは分かりませんが、自宅で告別式が終わると、親族などの人々がバスで火葬場に向かう時に送るのが一般的でしょうか。また、火葬が終わりお墓に埋葬する時に、集落の人々がいっしょに参列することはあります。	宇都宮市瑞穂野地区	
	葬儀終了後、火葬、土葬にかかわらず野辺送りをする。	小山市間々田地区	
	列順と役付け…辻ロウ(組内の者)、鉦(組内の者)、提燈(近親者)、竜タツ(兄弟など)、四本旗(組内の者)、花籠(兄弟など)、香炉(近親者)、生花(孫など)、杖(孫など)、手燭(孫など)、位牌(施主)、霊膳(施主の妻)、ゼンノツナ(近親者の女性)、棺(組内の者)、天蓋(近親者)、一般参列人。	上都賀郡栗野町全域	
	葬儀の挨拶は身内の者が行い、葬列の順列を身内の近い順に持ち物を決め墓に行く。参列者は身内・親戚等と組内。	上都賀郡西方町全域(組内で葬儀を行っている地域のみ)	
	葛城では野辺送りのことをミオクリと呼んでいる。ミオクリの役付けは死者と血筋の近い順に決定していく。	さくら市喜連川。当家(組内)で葬儀を行う場合は野辺送りを行っている。町の周辺地域が多い	
	お寺の指示による。	塩谷郡藤原町全域	
	無回答	那須烏山市烏山地区	
	無回答	芳賀郡益子町。特定の地区というわけではないが、土葬の場合が多い。	



野辺送り 実施有無	方法	市町村 (五十音順) *1	いつ頃まで
現在 は行 われ てい ない が、 以前 は行 われ てい た (9)	遺族、親戚、組内(となり組、大組等)の人が列を組んで墓地まで歩いて行く。花かご、ちょうちん、めいき、お膳をもって行く。神主がのりとをあげ、納骨して、線香をあげ、くだもの、茶菓子等をそなえる。家に帰ってきて、「ひあげ」の膳を食し、その夜念仏をあげ白だんごに砂糖をつけて食べる。少し前までは納骨の後①料理屋さん等で②自宅に戻って、「ひあげ」を行ったが、現在は火葬場で待ち時間に「ひあげ」を行ったあと納骨するのが一般的である。昔のように列をつくって墓地まで行くような野辺送りはないが、告別式のあと遺体を霊柩車に乗せ、火葬場へ出発するのを見送る事が野辺送りになるのではないと思われる(遺体を座敷から運び出した後、女性が座敷にざるかごをころがし、もう一人がほうきではき出すしぐさをして「お水ー」とさけぶ。男性は花かごをゆさぶり、半紙でくるんだお金をまく。洗面器に水をくみ、手を洗って清める)。	今市市塩野室地区全域	無回答
	告別式に参列した方。	宇都宮市篠井町、石那田町、下小池町、上小池町、飯山町	10年ぐらい前まで (土葬の頃)
	葬儀のあと、組内の人が浄めをしたり、竹をあんだ竹籠に入れたお金をまき、集まって来た人々がひろった。	宇都宮市豊郷地区の一部	20年ぐらい前まで (長岡地区)
	組内の人が竹でかど門を作り、荷車にひもをつけ親族と一緒に引っぱり、お墓まで遺体を運ぶ。	宇都宮市横川地区	40年前ぐらいまで
	隣組で行う。参列者一遺族、親戚、知人、友人。野辺送りーカド送り。	鹿沼市南押原地区全域	無回答
	班長が分担し実施。	河内郡上河内町全域	昭和30年代頃まで
	埋葬終了後、当家に帰りウツギの木の枝で作った杖(竹で作った杖でもよい)に草履の裏におハギをぬり付けた右の草履を縄で縛って竹にむすび付けたものと花・線香を持って親戚、親友、班内の人々で墓地に行き35日の墓参りをした。墓参の準備は班内の人が行う。	栃木市国府地区(旧国府村)	平成2～3年頃まで
	土葬で実施する場合に実施していた。葬儀で出棺となり、先松明(講中の担当)を先頭に六尺が鞘を肩にかつぎ親族が位牌・遺影・生花を持って続き、更に参列者が続いた。参列者全員ではない場合が多かった。	那須郡那珂川町全域	昭和60年代まで
	資料添付〔ノベオクリは、モチモノという葬具によって順列を形成。松明、高張、花籠、手燭、造花(生花)、香炉、霊前、位牌、竜頭、棺、天蓋、木碑、旗、その他出棺に付属するもの。葬具のうち、位牌は相続人が持ち、枕飯を相続人の妻が持ったりする例が多い。棺の前後にエンツナギ、ゼンノツナと呼ばれる更しの長い白布がくくりつけられ、血縁者、特に女性がそれを手に握りしめて進んでいく。行列の先頭では、地区の阿弥陀堂の守門僧が鐘を打ち鳴らして歩いて行く。この鐘の音から葬式のことをジャンボ(ジャンボン)などといい、時にはノベオクリ自体のことをジャンボと呼ぶことがある。男は笠をかぶったり、白い布や白紙を三角形に切ったものを額にかけたりする。女は綿帽子をかぶる。これを額隠しという〕。	真岡市の中心部で火葬場ができるのが早かった地域以外はほとんどの地域で行われていた。浄土真宗では元から火葬だった。それ以外の地域は土葬が一般的でどの地区といえない。ほぼ全般。	昭和50年代ぐらいまで

\*1 調査後、市町村合併した地域もあるが、調査時点の市町村名で記載した。

\*2 カッコは回答数

野辺送りは告別式→野辺送り→土葬という一連の葬儀の流れのひとつとして行われていた。

前述のように現在も野辺送りが行われているのは12地域であったが、うち土葬が行われているのは2地域のみであった。つまり大部分の地域は、火葬に変わった後も野辺送りを続けているのである。現在は公営火葬場が使用され、自宅と離れている場合が少なくないし、斎場での告別式も増えている。火葬に変わった後も、ましてや現在のように自宅、告別式の場、火葬場、墓地が散在しているなか野辺送りが続いている地域があるのは少し意外である。しかし「民俗小事典死と葬送」(2005)にも芳賀郡市貝町で平成16(2004)年に執り行われた野辺送りの様子が記録されているように、野辺送りは続いているのである。火葬の場合の野辺送りとはどのようなものなのであろうか。2つの回答から引いてみよう。

例／野辺送りは火葬と告別式の順番によって異なる。告別式が後になった場合、自宅から寺までおねりして来る。その際、施主は位牌を持ち、その他のもの、お骨、七本木、お膳等、家族・親戚が役割分担してくる。住職の先導で組合の人が楽器を持って、住職の引馨、銅羅、妙鉢を1回ずつ鳴らしながらおねりして来る。本堂の前で時計と反対回りで3回半回って本堂に入る。(足利市大沼田町西根)

例／告別式終了後、火葬が済んだ時、自宅で告別式を行った場合は自宅から墓地まで、親族、隣組み等が隊列を組んで行く。役割は宗派によって異なる。最近は車で墓地に行く場合、葬祭場から直接墓地に行くこともある。(足利市久野地区)

以上のように、火葬の場合、火葬場→告別式→野辺送り→墓地、あるいは告別式→火葬場→野辺送り→墓地という流れで執り行われることがわかる。これに亡くなった場所から自宅への移動、あるいは通夜や告別式の場への移動が加わるから、もし病院で亡くなり斎場で告別式を行うとなると、病院→自宅→火葬場→斎場(通夜および告別式)→野辺送り→墓地、または病院→自宅→斎場(通夜および告別式)→火葬場→野辺送り→墓地という流れになる。墓地に埋葬されるまでに幾度となく移動をくり返すのである。この点について前述の波平(2003)は、現在の霊柩車が通常の自動車とは全く意匠が異なる点を指摘したうえで、多くの人手と時間をかけて行われる霊柩車での移動は、形式は変わっても昔の野辺送りにおける「死者となっていくための旅路」という機能や意味をもつのではないかとしている。本調査でも「現在行われているものが野辺送りなのかはわかりませんが、自宅で告別式が終わると、親族などがバスで火葬場に向かう時に送るのが一般的です」(宇都宮市瑞穂野地区)という回答が寄せられ、霊柩車での移動に同様の意味づけを見いだししているのがわかる。ましてや土葬から火葬に変わった現在も昔ながらの葬列を組んでの野辺送りが残されていることは、地域の人々で死者の旅路を見送る習俗が根付いていることの表れに他ならない。

### 3. その他の弔いの習俗

葬儀以後の供養について自由記述で回答を求めたところ、14の回答が得られた（表4）。そのほとんどが、葬儀の翌朝などに墓参りに行くというものであった。その名称、墓参時期、墓参者等は地域によって異なっていた。墓起こし（芳賀郡益子町）、朝起こし（塩谷郡藤原町）、仏さん起こし（さくら市喜連川）、塚起こし（芳賀郡益子町）といった呼称からわかるとおり、死者を起こすために墓参りをするという意味合いが示唆された。その他、墓直し（足利市毛野）、塚直し（芳賀郡芳賀町）と呼ぶ地域もあった。墓参時期で多かったのは翌朝で、その他、初七日、七日ごとなどがあった。誰にも会わないように行くとい

表4 その他の習俗

内容	市町村（五十音順）*1
葬式の翌朝の墓参りは「墓直し」と呼ばれ、葬家、親戚などが墓参りに来ました。10年位前からこれも行なわれなくなっています。	足利市毛野
葬式翌朝の墓参り…土葬のころ（約10年前まで）	今市市
葬儀の翌朝（早朝）当家の人が墓に「おこしに行く」。組の女性達は、葬儀の序づけを済ませてから墓まいりに行くが葬儀にあがった供物を持っていき、お墓にあげたあと、皆で食べる。	今市市塩野室
「魂呼び」葬式の翌朝（朝早く、誰にも逢わないようにする）声かけに行く（相続人が行く）。	宇都宮市篠井地区
翌朝の早朝に家族の一人が墓に参る（朝起こしに行く、という。名称不明）	宇都宮市富屋地区
翌朝死者を起こす（目ざめさせる）。	宇都宮市豊郷地区
葬儀の翌朝に墓参りをする地域があります。	宇都宮市瑞穂野地区
農村地帯では現在も行なわれている。	宇都宮市横川地区
身内で葬式の翌日墓参りをする。	大田原市
一周忌の代わりに翌朝の墓参り。	鹿沼市板荷
お墓参りをしている地域としていない地域がある。お墓には家族と組内がお参りしている。	鹿沼市北犬飼
初七日までの墓参り。	鹿沼市南押原
葬式の翌朝と、初七日に組内の者が墓参りに行く。葬列で花かごに小銭を入れてまく。参列者が拾う（まきせん）。	上都賀郡栗野町
地域は特定できない。お骨を四十九日目まで仏壇に置いておく場合は行っていない。当日、埋葬した場合は行われている。呼び名はよく分からない。「仏さん起し」とか「朝の墓参」などまちまちである。	さくら市喜連川
翌朝は班内一人ずつ出て初7日の墓参り、49日まで続ける	佐野市赤見
葬式の翌朝早く施主が六角棒を持参し他人の目にふれる事なく墓参りに行く。	塩谷郡塩谷町
旧三依村の一部。朝起し。	塩谷郡藤原町
一七日墓参り。20年位前までは毎日一週間墓参りしたが、7日毎（日曜日）に変わり、現在はごく親しい者以外はしない。	下都賀郡藤原町
葬儀・納骨（土葬のときは埋葬）後当家に帰り35日墓参りに再び基地に行く。夜佛前で13佛・極集を近親者と班内の人たちで唱える。その後翌日より7日間墓参りをする時間を決めて近親者と班内の人々で1週間墓参りをする。	栃木市国府地区
町内全域で「塚なおし」とか言う。	芳賀郡芳賀町
全域的に土葬であったころは行なわれていたと思われる。墓起し、塚起し。10～20年前まで。	芳賀郡益子町

\*1 調査後、市町村合併した地域もあるが、調査時点の市町村名で記載した。

う地域もあった(宇都宮市篠井地区、塩谷郡塩谷町)。墓参者については、身内(大田原市、宇都宮市篠井地区、宇都宮市富屋地区、今市市塩野室、塩谷郡塩谷町、足利市毛野)、身内と組の人(栃木市国府地区、鹿沼市北大飼)に分かれた。今市市塩野室では、「組の女性たちは、葬儀の片づけを済ませてから墓参りに行くが、葬儀にあがった供物を持って行き、お墓にあげた後、皆で食べる」という。

#### Ⅳ まとめと今後の課題

葬儀をめぐる状況、葬儀に対する意識が多様化するなか、本調査の結果により今なお葬祭業者にすべてを任せる葬儀は少数であることがわかった。寺内ら(2000)は、ひとたび斎場葬への移行の流れが始まると、斎場葬がかなりの割合を占めるようになるスパイラル効果が発生すると指摘し、そのスパイラルのなかに宇都宮市も入っていると述べている。果たして本当にそうなのであろうか。組のみで執り行われる、あるいは組と葬祭業者が関わる葬儀を合わせると、地域に関わる葬儀が多くを占めていた。なかでももっとも多かったのは組と葬祭業者が一緒に執り行う葬儀であるが、葬祭業者の関与の度合い、役割分担など葬儀方法には個別性が目立ち、斎場葬が増加していこうとも、一様に葬祭業者主導の葬儀へと移行していくわけではないといえる。一方で、「死者の旅路を見送る」意味をもつとされる野辺送りの習俗が火葬への移行に伴い途絶えつつあることを考えると、地域での葬儀が今後どのように変化していくのか注目される。

栃木県内29の葬祭業者が加盟する栃葬連組合によると、葬儀への葬祭業者の関与が高まった時期、とりわけ斎場建設時期については把握されていない。また前述のように葬祭業者がどの程度地域の葬儀に関わるかは個別性が高い。まさしく葬祭業者を加えた新たな葬儀方法へと変化する過渡期にあるといえる。したがって今後は、地域的要因、個人的要因といった背景要因にも着目しながら、各地域ごとに葬祭業者の葬儀への関わりを含めた葬儀の変遷について詳細な検討を行っていききたい。

#### 引用文献

- 佐東京子 1983 現代葬式事情 思想の科学第7次、52-57 思想の科学社  
新谷尚紀・関沢まゆみ編 2005 民俗小事典死と葬送 吉川弘文館  
寺石雅英・寺石悦章 2000 地域の宗教的特性と葬儀市場の競争構造——斎場建設ブームがもたらすもの 群馬大学社会情報学部研究論集、7、225-236  
波平恵美子 2003 死と葬送 新谷尚紀・波平恵美子・湯川洋司編 暮らしの中の民俗学 第3巻一生、172-199 吉川弘文館  
日本消費者協会(編) 2003 第7回葬儀に関するアンケート報告 葬儀の実態と消費者意識 月刊消費者10月号、607、8-13 日本消費者協会  
碑文谷創 2002 漂流する葬儀——「葬」と「喪」のはざまに 別冊東北学、3、112-128 東北芸術

工科大学東北文化研究センター

深江誠子 2005 日本の葬儀・墓を再考 平安女学院大学研究年報、5、31-38

福澤昭司 2002 葬儀社の進出と葬儀の変容——松本市を事例として 国立歴史民俗博物館編 葬儀と墓の現在——民俗の変容、93-113 吉川弘文館

星野敏 1999 集落行事・生活慣習の見直しに関する計画論的研究 農村計画論文集、1、211-216 農村計画学会

村上興匡 2001 近代葬祭業の成立と葬儀慣習の変遷 国立歴史民俗博物館研究報告、91、137-150

森謙二 1999 葬送と社会集団——葬法の社会学的考察 講座人間と環境、9、126-153 昭和堂

八木澤壮一 1985 葬儀場所と死亡地の変遷について——葬祭施設の建築計画に関する研究その56 日本建築学会大会学術講演梗概集、509-510

八木澤壮一 1999 葬送方法と葬儀形態の現状と動向について——新聞死亡記事の分析 日本建築学会講演梗概集、493-494

## 謝辞

本調査では多くの方々に調査にご協力いただきました。この場を借りて改めて厚く御礼申し上げます。本研究の一部は人間文化学部2期生とともに平成17年度「心理学演習」において実施しました。彼らの頑張りに感謝の意を表します。予備調査（インタビュー）：荒井宏太、石並香織、大島麻衣、笠原美枝、酒寄愛子、志村祐也、砂岡悠加、常盤恵莉子、藤倉望、渡辺弥沙。本調査（質問紙調査）参加者については本人によるコメントとともに紹介します。○石崎博之（組内と葬祭業者による葬儀担当）：生前交流のあった組内の人がみんな最後のお別れをし、それにより地域内での密接な関係につながっていくと思う。葬儀も含め昔からの風習を後世に伝えていく役目を担っているなかに私たち自身も入っていることを忘れてはならないと思う。○神山和也（土葬担当）：床取りのように体を動かす役割は少なくなっている。お腹が減った感覚を知らないとか満腹感の幸せさはわからないように、死に触れ考えることは生きていることのすばらしさ、大切さを感じることができるし、昔の人はそうしたことを当たり前のように子どもの頃から学んでいたのかもしれない。○高橋隼人（組内での葬儀担当）：10年以上くらい前まではどこでも自宅葬だったが、その後斎場で行うことも多くなってきた。そのため組での手伝いが薄らいできたり、単位が集落から班へと小さくなってきていると考えられる。○渡邊美和子（野辺送り担当）：墓場までの道のりは親しかった人たちにとってはとても大切な時間となりうる。今まで一緒に過ごしてきた日々を歩いている間に静かに思い返すことができ、悲しみを徐々にやわらげていくことが出来るのではないのかと思った。以上五十音順。

追記：本研究の一部については第71回日本民族衛生学会総会（2006年11月9日、沖縄県立看護大学）において発表を行った。